

# 明治30年代における新聞スポーツジャーナリズム —大阪毎日新聞の分析を通して—

## Sports Journalism in Meiji 30 Era -Through the analysis of Osaka-Mainichi Shinbun -

綿貫 慶徳

Yoshinori WATANUKI

上智大学 Sophia University

**要旨**・・・本研究は、近代日本における新聞スポーツジャーナリズムの礎を築いた明治30年代の大阪毎日新聞に注目し、同紙に掲載されたスポーツ関連記事の分析から当時の新聞スポーツジャーナリズムの実態を浮き彫りにし、それをもとに各種史料を参照しつつ、新聞スポーツジャーナリズムの読者層の推察を試み、読者にたいする機能を明らかにするものである。検討の結果、従前の研究で指摘されてきた相撲の独占状態が実証されるとともに、「大日本武徳会」「運動会（陸上）」の関連記事が数多く認められた。両者に着目して読者層を推察したところ、明治30年当時のスポーツの直接的な担い手であった中・高等教育機関の学生および卒業生を超えた人々の存在が浮上した。また、両者の関連記事の大部分が「事実情報」であったことから、おおむね読者にたいして両者にまつわる広報的な機能を果たしていたことが確認された。

**キーワード** 新聞スポーツジャーナリズム、大阪毎日新聞、大日本武徳会、運動会、読者層

### 1. はじめに

#### 【研究目的】

- ・近代日本における新聞スポーツジャーナリズムの礎を築いた明治30年代の大阪毎日新聞に注目し、従前に見過ごされてきたメディアイベント以外の新聞スポーツジャーナリズムの全体的な傾向と特色を浮き彫りにする。
- ・上記の結果を手掛かりとして、新聞スポーツジャーナリズムの読者層のひろがりやを推察し、読者に対する新聞スポーツジャーナリズムの機能を明らかにする。

#### 【先行研究】

近代日本のスポーツジャーナリズム通史をとりまとめたもの、明治30年代における大阪毎日新聞のメディアイベントについて論及したものを先行研究に位置づけ、以下に挙げておきたい。

- ・寶學淳郎「スポーツとメディア—その歴史・社会的理解—」『現代メディアスポーツ論』世界思想社、2002年、3-24頁
- ・津金澤聰廣「大阪毎日新聞社の『事業活動』と地域生活・文化—本山彦一の時代を中心に—」『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年、217-248頁
- ・竹村民郎『笑楽の系譜—都市と余暇文化』同文館、1998年、101-134頁
- ・綿貫慶徳「明治後期から大正期における大阪毎日新聞社の浜寺海水浴場経営に関する史的考察—新聞販売ターゲットとしての新中間層に着目して—」『体育史研究』第21号、2004年、1-14頁
- ・綿貫慶徳「メディアが編むマラソン—20世紀初頭の『大阪毎日新聞』から—」『近代日本の身体表象 演じる身体・競う身体』森話社、2013年、197-226頁

#### 【分析対象】

明治30年1月1日付から明治39年12月31日付までの大阪毎日新聞（国立国会図書館所蔵マイクロフィルム）を悉皆調査し、同期間のスポーツ関連記事を渉猟した。野球、水泳、テニス、陸上競技に関わるメディアイベントの検討をもとに、近代日本におけるスポーツのコマーシャルリズムの実態解明を積み重ねる途次で同期間に照準を定めた背景には、コマーシャルリズムが胎動

せんとする転換期の新聞スポーツジャーナリズムの傾向と特色の把握を意図したからであり、これに加えて、黎明期の新聞スポーツジャーナリズムの実態を詳らかにする取り組みが、メディア史、スポーツ史の各研究分野において看過されてきたからである。

スポーツ関連記事を抽出するにあたり、以下の条件を設定した<sup>1)</sup>。

- ・「(●) が付された見出し」「大見出し」のなかで、スポーツに関する用語が認められた記事
- ・見出しのなかで、スポーツに関する用語が認められなくとも、スポーツを主な内容とした記事

## 2. 明治30年代における新聞スポーツジャーナリズムの実態

スポーツ関連記事を大項目、「相撲」「スポーツ関連団体」「社会スポーツ・学校スポーツ」「アニマルスポーツ」「体育行政」「その他」に分類したうえで、大項目における固有のスポーツ関連団体、スポーツ種目、体育事項等を中項目に分類した<sup>2)</sup>。複数の大項目にまたがるスポーツ関連記事については、中項目の該当項目にそれぞれ数を加えた。これをもとに分析結果をとりまとめたのが、以下の表である。

表 明治30年代におけるスポーツ関連記事数一覧 (大阪毎日新聞)

大項目	中項目	明治30	明治31	明治32	明治33	明治34	明治35	明治36	明治37	明治38	明治39	中項目	大項目	
相撲	相撲	113	176	394	358	322	296	399	222	216	295	2791	2791	
スポーツ関連団体	大日本武徳会	22	12	33	39	68	39	35	21	38	56	363	543	
	日本体育会	11	25	27	24	36	25	21	6	2	3	180		
運動会	運動会(陸上)	5	10	25	48	52	47	37	23	31	38	316	324	
	運動会(水上)	1			1				1	4	1	8		
社会スポーツ 学校スポーツ	ボート	16 (社1学3)	23 (社3学2)	23 (社4)	30 (社7学6)	28 (社1学16)	22 (社2学15)	11 (学6)	12 (学11)	13 (社1学10)	21 (学15)	199 (社19学84画89不5他2)	781 (社会:380) (学校:270) ※社会学:113 ※その他:33 ※不明:5	
	自転車	1 (社1)	3 (社3)	7 (社7)	18 (社18)	46 (社45)	42 (社42)	36 (社36)	5 (社5)	14 (社14)	15 (地14学1)	187 (社185学1他1)		
	野球	6 (学6)	8 (学7)	2 (学2)	10 (学9)	18 (学18)	2 (学2)	6 (学6)		11 (学10)	34 (学27)	97 (学87画7他3)		
	水泳・海水浴	2 (社1学1)	4 (社2学1)	5 (社4学1)	8 (社7)	15 (社9学4)	3 (社1学2)	5 (社2学3)	5 (社3)	34 (社14学11)	13 (社5学4)	94 (社48学27画1他18)		
	武術・武道	2 (社2)	8 (社6学2)	7 (社6学1)	4 (社4)	16 (社11学3)	13 (社11学2)	10 (社8学1)	5 (社3)	7 (社4学3)	7 (社6学1)	79 (社61学13画4他1)		
	テニス			2 (社2)		2 (社1)	4 (学3)	5 (学5)	8 (学5)	14 (社5学6)	42 (社1学32)	77 (社9学51画12他5)		
	長距離走		1 (社1)			1 (学1)	23 (地20学3)				1	26 (社21学4他1)		
	登山					9 (社9)	4 (社4)	1 (社1)		1 (学1)	1 (学1)	16 (社14学2)		
	ヨット						6 (地9学1)					6 (社3学1他2)		
	アニマルスポーツ	競馬・曲馬 馬術・耕馬	6	1	10	2	3	11	7		23			63
闘牛		2										2		
闘犬		1										1		
闘鶏				1		2						3		
体育行政	体育振興		2		6	7		2	3	4	7	31	52	
	学校衛生	3	4	2	6	1	1		1		1	19		
	学校体育	1	1									2		
その他	自動車					1		6	1	1		9	36	
	運動講習						1			3	1	5		
	行軍					5						5		
	フットボール						1	1	1			3		
	過足	1					1					2		
	卓球									2		2		
	徒歩旅行			1				1				2		
	クリケット			1								1		
	ボクシング										1			1
	蹴鞠			1								1		
五輪				1							1			
不明				2	1					1	4			
総数 (相撲外)	193 (80)	278 (102)	541 (147)	557 (199)	633 (311)	541 (245)	583 (184)	314 (92)	418 (202)	538 (243)	4596 (1805)	4596 (1805)		

上表から一目で明らかなのは、相撲の記事数が他を圧倒している点である。当時の新聞スポーツジャーナリズムが相撲を主として成立していたことは、従前の研究において実証レベルにまでは達しなくとも、断片的にはあれ度々指摘されてきたところである<sup>3)</sup>。この点については上表を以て実証されたわけであるが、また、メディア史研究とスポーツ史研究の交差点から浮上する、明治30年代を迎えて欧米から摂取した野球、テニスに代表される近代スポーツが普及・拡大していくスポーツ界の

動向が、スポーツ関連団体や運動会と近代スポーツとの間で記事数に大きな差が認められるように、新聞スポーツジャーナリズムの実態に反映されていないことが明らかにされた。ともかくも、新聞スポーツジャーナリズムの読者層にまで検討をひろげる本研究で注目したいのは、中項目で300を超える記事数を記録した「大日本武徳会」および「運動会（陸上）」である。それは、明治30年代当時におけるスポーツの直接的な担い手が、中・高等教育機関の学生、卒業生であった<sup>4)</sup>とするスポーツ史の分野において一般化されている見解を以て、新聞スポーツジャーナリズムの読者層のなかに彼らが位置づけられるとしても、〈中・高等教育機関の学生、卒業生＝読者層〉という限定的な図式が成立するわけではないことが、中項目の両者から示唆されるためである<sup>5)</sup>。「大日本武徳会」の会員、「運動会（陸上）」を観覧していた人々、彼らの生活世界において身近な距離にあったであろう両項目への関心は、他の中項目に比べて強かったものと考えられる。そこで以下、両項目の関連記事のスタイルを小項目（「事実情報」「事実・意見情報」「演説・コメント」「戦評」「よみもの」）に分類したうえで、当時の大阪毎日新聞が関西地方のブロック紙であった状況に鑑み、市場の獲得へ向けた動きが活発にみられた京阪地域における新聞スポーツジャーナリズムの読者層のひろがりを探察し、彼らへ及ぼした機能を明らかにしていきたい。

### 3. スポーツ関連記事にみる読者層の様相、読者への機能

#### 【大日本武徳会】

相撲を除外した中項目で最多記事数を記録した大日本武徳会は、平安遷都千百年祭にともなう平安神宮設立を直接の契機とし、武道の奨励による国民の志気振作を目的として明治28年4月17日に設立された。大日本武徳会は、各府県の知事を支部長、警察部長を支部副長とする官制色の濃い団体で、明治29年の富山を端緒として地方官僚機構とくに警察機構をまるごと動員しながら府県支部を組織化させていった。そのなかで地方会員の勧誘を強力に推し進め、明治30年に約11万人であった会員総数は、明治34年に約40万人、明治38年に約104万人と飛躍的に増加していった。大日本武徳会規則（明治30年12月28日改正）の総則には、武道の奨励を目的として、①武徳殿の造営②武徳祭の開催③演武大会の開催④演武場の設立、武道講習の実施⑤古武術の保存⑥武器の蒐集⑦戦史・武芸史・武器史の編纂⑧武徳会誌の発行、を遂行することが記載されている。また、総則のなかでは本部を京都に置き、漸次各地方に支部を設置する旨についても記載されている。

総則のなかに認められる以上の内容と大阪毎日新聞に掲載された大日本武徳会の関連記事との相互関係を分析したところ、以下にあげる特色が導き出された。

- ・本部や地方支部の動向、④の武道講習の案内について、雑報でとりあげた事実情報が関連記事全体の7割強を占めていた。
- ・大日本武徳会が総力をあげて京都で実施した②、③、および明治28年より滋賀県知事主催のもとに琵琶湖で開催されていた大日本連合競漕会を引き継ぐかたちで明治34年より運営を手掛けた中学校を対象とする大日本武徳会短艇競漕会については、「事実情報」のみならず大会の概況や景況を独自にまとめた「事実・意見情報」が紙面の複数段にまたがり掲載され、これらにまつわる「演説・コメント」「戦評」が散見された。
- ・総則のなかに記載されたその他の項目については、記事数にして二桁に及ばないものであった。

以上にあげた大日本武徳会の関連記事の特色を参照する限り、関連記事の情報源のおおかたは大日本武徳会が本部を構えた京都にあった。明治35年4月時点で京都府を本籍としていた会員数は43645人であった。その一方で、『日本帝国統計年鑑第23回』のなかの「本籍人口族称別（明治36年12月31日現在）」によれば、大日本武徳会員の中枢を占めた男性士族の人口について、京都府は15045人という数字であった。これらの数字を単純に並べるならば、会員の過半数を占めた存在が平民であったと考えられることから、新聞スポーツジャーナリズムの読者層は、平民を包括した士族を中心とする構造のもとに形成されていたと推察される。これは、注5にあげた内川による読者研究で提示された知見に符号するものだが、職種をはじめとする会員の細かな属性が確認される史料を欠いたなかでの推察に終始していることは否定できないところである。ただ、京都における新聞販売興亡が大阪毎日新聞に大阪朝日新聞、京都日出新聞を交えた群雄割拠の様相を呈していたという状況、支局の拡充、付録の発行、配達区域の拡張といった大阪毎日新聞による京都への積極的進出が図られていたという事実を考慮するならば、京都を本拠とする大日本武徳会の関連記事が、大日本武徳会員をとりこもうとする読者獲得構造のなかに組み込まれ、作成されていたと考えることは可能ではなからうか。ともかくも、関連記事の大部分を事実情報が占めていた実態は、大阪毎日新聞が読者にたいする大日本武徳会の広報的な機能を果たしていたことを示唆するものである。

#### 【運動会（陸上）】

明治7年の海軍兵学寮における競闘遊戯会をもって産声をあげた運動会は、文部省により児童生徒の集団訓練と体位向上を

目的として運動会が奨励されると、学校行事の一つとして定着していき、娯楽の少なかった時代にあつて学校の枠組みを越えて世人の関心を集めていった。明治30年代における運動会のスタイルは、①陸上競技会の性格にほぼ等しい競争的要素の色濃いもの②学校体育の成果の公開を目的とした発表的要素の色濃いもの③企業組織における構成員の親睦交流を目的としたものにそれぞれ大別される。上記一覧表の大項目「運動会（陸上）」の関連記事（総数316）を渉猟し、学校内外に区分したところ、学校関連（280）、学校外関連（34）、不明（2）であつた。関連記事の大部分は学校の運動会に該当するものであつたが、学校外での運動会を含めて大阪毎日新聞に掲載された運動会の関連記事を分析したところ、以下にあげる特色が導き出された。

- ・記事総数の約3割強が大阪毎日新聞の本拠である大阪の事象をとりあげたものであつた。
- ・関西、西日本における②、③に関わる運動会の告知を雑報でとりあげた「事実情報」が約8割占めていた。その他、僅かに過ぎないが、小樽、水戸、東京、前橋、静岡、浜松、釜山での運動会にふれた雑報が認められた。
- ・①については、京都大学や第三高等学校の陸上運動会、府立各中学校連合運動会、府立中学校個別の運動会が該当し、競技会であることに加えて、教育界や地域社会への体育奨励を目的としていたこれらの運動会については、毎年にもわたり「事実・意見情報」が認められた。
- ・明治34年以後、大阪の高等女学校の運動会に関する記事が掲載されていくが、それらは①に等しい扱いで、「よみもの」も編まれていた。

以上にあげた特色をもとに読者層の推察を試みるならば、当時のスポーツの中心的な担い手たる中・高等教育機関の学生および卒業生とは異なる人々が浮上してくる。①や高等女学校の運動会における「事実・意見情報」や「よみもの」のなかに登場する人々は、多少なりの情景描写の誇張はあるにせよ、「数万、数千という観覧者数」「老幼、婦人」といった文言が紙面に記載されている。また、学校関係の文章や記録、諸団体の会報をもとに編纂された自治体史を渉猟しても同様の文言が認められる。高等女学校の運動会はともかくとして、①に関わる競争的要素の濃い運動会においても、そのなかにレクリエーション的要素が組み込まれていたことを考慮するならば、決してスポーツの理解力を獲得していなかったとしても、地域をあげての祭典という色彩を帯びていた運動会の関連記事に接した読者のひろがりには、スポーツの中心的な担い手を超えていたものと十分に推察されよう。読者への機能については、上でとりあげた大日本武徳会の例と同様に、運動会に関わる「事実情報」の伝達にあつたと捉えることができる。

#### 4. おわりに

本研究は、近代日本における新聞スポーツジャーナリズムの礎を築いた明治30年代の大阪毎日新聞に注目し、同紙に掲載されたスポーツ関連記事分析から当時の新聞スポーツジャーナリズムの実態を浮き彫りにしたうえで、新聞スポーツジャーナリズムの読者層のひろがりや推察し、読者にたいする機能を明らかにするものであつた。検討結果を整理すると以下のようにまとめられる。

1. 明治30年代の新聞スポーツジャーナリズムは、「相撲ジャーナリズム」と称しても過言ではないものであつた。
2. 本論で着目した「大日本武徳会」や「運動会（陸上）」と当時の近代スポーツの代表的種目な競技種目であつた「野球」や「テニス」との間で記事数に大きな差が認められたことから、明治30年代を迎えて欧米から摂取した近代スポーツが普及・拡大していくスポーツ界の動向と新聞スポーツジャーナリズムの実態との間に乖離が生じていることが明らかになった。
3. 大阪毎日新聞のなかに認められた「大日本武徳会」「運動会（陸上）」の関連記事に記載されている内容、統計史料、自治体史を渉猟する限り、明治30年代におけるスポーツの直接的な担い手であつた中・高等教育機関の学生および卒業生の枠組を超えた平民、女性といった人々を新聞スポーツジャーナリズムの読者層として措定しうることを推察した。
4. 「大日本武徳会」「運動会（陸上）」の関連記事の大部分は、会の動向や講習会の案内、運動会の告知を内容とする「事実情報」で、おおむね読者にたいして両者にまつわる広報的な機能を果たしていたことが確認された。

#### 《注》

- 1) また以下については、分析対象から除外した。
  - ・「地方付録」「地方通信」のなかに認められるスポーツ関連記事
  - ・「天長節」「招魂祭」を見出しとするスポーツ関連記事

- ・断片的にスポーツを盛り込んだ「新聞小説」
  - ・「記事訂正」「記事面指示」を内容としたスポーツ関連記事
  - ・メディアイベントに関わる記事
  - ・「軍事訓練」「軍事イベント」「学校単位の軍事演習」など、軍隊のうちで実施され、もしくは軍事に直接連なるスポーツ関連記事
  - ・伝統芸能（舞踊、舞踏）や盤上遊戯（囲碁、玉突）など、趣味・娯楽の色彩が濃いスポーツ関連記事
- 2) 「中項目」の「自転車」について、「普及・販売状況」「競技外での事故」「仮装行列」に関わる記事は除外した。また「武術・武道」に網羅された内容は、「柔術」「柔道」「弓術」「剣術」「撃剣」「剣舞」である。
- 3) この代表的な例として、以下の研究書をあげておきたい。
- ・寶學淳郎「スポーツとメディア—その歴史・社会的理解—」『現代メディアスポーツ論』世界思想社、2002年、7頁
  - ・リー・トンプソン「伝統スポーツとメディア」『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房、2012年、152-156頁
- 4) 竹之下休蔵・岸野雄三『近代日本学校体育史』東洋館出版社、1969年、59頁
- 5) 明治30年代を包含した従前の新聞読者研究は、周知のとおり以下の論考が教典として位置づけられている。本研究では、これらの知見を参照しつつ、スポーツジャーナリズムという観点から新聞読者層の検討を試みていきたい。
- ・内川芳美「新聞読者の変遷」『新聞研究』第120号、1961年、19-27頁
  - ・山本武俊『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1981年

## 《参考文献》

### 【史料】

(新聞) 『大阪毎日新聞』(国立国会図書館所蔵マイクロフィルム)

(新聞社史等)

大阪毎日新聞社編『大阪毎日新聞五十年』大阪毎日新聞社、1932年

川上富蔵編『毎日新聞販売史 戦前・大阪編』毎日新聞大阪開発株式会社、1979年

京都新聞社史編さん小委員会編『京都新聞百年史』京都新聞社、1979年

社史編纂委員会編『毎日新聞七十年』毎日新聞社、1952年

日本新聞販売協会新聞販売史百年史刊行委員会編『新聞販売百年史』日本新聞販売協会、1969年

毎日新聞130年史刊行委員会編『「毎日」の3世紀(上巻)』毎日新聞社、2002年

毎日新聞百年史刊行委員会編『毎日新聞百年史』毎日新聞社、1972年

(統計) 内閣統計局編『日本帝国統計年鑑第23回』東京統計協会出版部、1904年

(自治体史)

池田市史編纂委員会編『新修池田市史 第3巻 近代編』池田市、2009年

大阪府編『大阪百年史』大阪府、1968年

京都市編『京都の歴史 8(古都の近代)』学芸書林、1975年

新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史 第5巻』大阪市、1991年

新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史 第6巻』大阪市、1994年

精華町史編纂委員会編『精華町史 本文編』精華町、1996年

豊中市史編さん委員会編『新修豊中市史 第10巻』豊中市、2002年

日吉町誌編さん委員会編『日吉町誌 上巻』京都府船井郡日吉町、1987年

舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史 通史編(下)』舞鶴市役所、1982年

(大日本武徳会関連)

全日本剣道連盟監修『大日本武徳会研究資料集成第1巻・第2巻』本の友社、2005年

大日本武徳会編『武徳誌(復刻版)』雄松堂出版、1篇1号(1906年6月)－4篇12号(1909年12月)

大日本武徳会編『武徳会誌(復刻版)』雄松堂出版、1号(1910年1月)－27号(1912年3月)

(著作・伝記等)

荒木利一郎編『稿本本山彦一翁伝』大阪毎日新聞社、1929年

大國壽吉『スポーツ生活半世紀』關書院、1948年

奥村信太郎『新聞に終始して』文芸春秋新社、1948年

奥村信太郎伝記刊行会編『奥村信太郎 日本近代新聞の先駆者』奥村信太郎伝記刊行会、1976年

久保田辰彦編『廿一大先覚記者伝』大阪毎日新聞社、1930年

故本社社長伝記編集委員会編『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社、1937年

白銀茂夫『なにわのミニスポーツ史』丸善、2003年

高石真五郎伝記刊行会編『高石さん』高石真五郎伝記刊行会、1969年

【研究書・研究論文】

有山輝雄『新聞と民衆』紀伊国屋書店、1973年

同上「村山龍平と本山彦一」『近代日本のジャーナリスト』御茶の水書房、1987年

同上『近代日本ジャーナリズムの構造』東京出版、1995年

同上『「中立」新聞の形成』世界思想社、2008年

今村嘉雄『日本体育史』不味堂出版、1970年

岡満男『大阪のジャーナリズム』大阪書籍、1987年

奥武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキャンダル』平凡社、2000年

岸野雄三「日本の体育の発展」『保健・体育学講座V体育学II』杏林書院、1963年

木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院、1970年

同上「運動会の変遷」『体育史講義』大修館書店、1994年

木村吉次編『体育・スポーツ史概論』市村出版、2008年

坂上康博「大日本武徳会の成立過程と構造-1895～1904年-」『行政社会論集』第1巻第3・4号、1989年

土屋礼子「大阪の新聞による女性読者の組織化」『近代大阪と都市文化』清文堂出版、2006年

中村民雄「大日本武徳会設立過程の研究-組織の形成と財政基盤について-」『日本武道学研究』島津書房、1988年

永嶺繁敏『〈読書国民〉の誕生 明治30年代の活字メディアと読書文化』日本エディターズスクール出版部、2004年

林隆敏「大日本武徳会の性格と特徴について」『体育・スポーツ社会学研究』第1号、1982年

山本文雄『日本マス・コミュニケーション史』東海大学出版局、1983年

吉見俊哉、他5名『運動会と近代日本』青弓社、1999年

渡辺融「明治期の中学校におけるスポーツ活動」『体育学紀要』第12号、1978年

【その他】

「FAN」第3巻第12号、1919年

「運動競技界」第3巻第1号、1922年